

目次

はじめに	2
東ティモール	4
循環型農業プロジェクトを開始	
マウベシ女性による食品加工	
コーヒー生産者協同組合支援活動	
独立10周年を祝う	
スリランカ	7
スリランカ北部緊急人道支援事業の終了	
ジャフナ乾燥魚事業、3年目を迎えて	
デニヤヤで有機栽培紅茶生産中	
南北の女性をつなぐサリーリサイクル	
東北	12
水産物販売支援とアンテナショップ開設	
仮設住宅居住者による農業支援	
北上町復興応援隊を開始	
東北復興支援事業報告会	
マレーシア	16
沿岸小漁民による水産資源保全活動支援	
ツアー	17
スリランカ／東ティモール／マレーシア	
フェアトレード	18
カフェ・ティモール／ウバ紅茶／アールグレイ紅茶／	
アロマ・ティモール	
淡路町マルシェ、オープン／イベント参加	
広報	20
WEBサイトのアクセス対策	
インターネットツールを使った広報の拡大	
民際協力ニュース	
2012年度活動暦	

はじめに

パルシックは2008年4月の発足から5年を経ました。アジア太平洋資料センターからの業務分割ではありましたが、コーヒー販売を初めとするフェアトレードの本格的なマーケティングはまったく新しい分野で、まずはパルシックとコーヒーや紅茶という商品とその背後にある活動を知って頂くことから始めました。「世界の各地で暮らす人が、それぞれの場所で自らが持つ力を生かして生活しつつ、お互いの経験や文化を尊重し合い、互いに出会い、対等平等につながっていく」という「パルシックのめざすもの」の理念を軸に一歩ずつ活動を広げた5年間でした。5年を経て、パルシックはまだ非常に狭い範囲ではありますが、徐々に認知されてきたということを実感します。またスリランカ（北部ジャフナ・ムライティブと南部デニヤヤ）、東ティモール（ディリとマウベシ）、マレーシア、東北の石巻市北上町と東京の淡路町の各地での活動も下記の通り広がり、新しい出会いも増えてきました。

2008	法人としての出発に当たり制度などの整備 WEB、広報ツールの制作 フェアトレード商品のパッケージ制作と初期営業
2009	スリランカ内戦の終結による緊急救援の開始（8月） 東ティモールにおけるコーヒー生産者協同組合モデル普及事業開始 東ティモール・コーヒー産地女性による生計向上プログラム開始
2010	スリランカ帰還民のための復興支援事業 スリランカ・ジャフナの漁村女性の干物生産事業開始（10月） スリランカ南部での支援開始（キトゥル〔＝椰子蜜〕生産） 東ティモール協同組合局局長の日本招聘
2011	3・11東日本大震災被災者支援活動の取り組み開始 スリランカ南部デニヤヤでの紅茶の有機栽培支援の開始 東ティモールにおけるハーブ生産とフェアトレードの開始
2012	東ティモール：循環型農業と森林保全活動の開始 スリランカ：ムライティブ県での復興支援事業の開始 東日本大震災被災者支援：石巻市北上町で農漁業を軸とした復興支援 東京事務所で淡路町マルシェオープン

【東ティモール】

2002年の主権回復（独立）から10年を経て、国内でも独立10周年の記念イベントを東ティモールに関わる諸団体と共同して祝いました。パルシックにとっても、コーヒー生産者支援事業を開始して10年の節目でした。これを機にパルシックは東ティモールでの重点を、森林保全と循環型農業事業活動に移しました。コーヒー事業もフェアトレードとしてのコーヒーの品質管理、生産者協同組合運営の人材育成などの分野で活動を継続しており、ハーブの生産と販売支援を含めて、女性たちによる食品加工支援も継続していますので、活動の分野が大きく広がっています。この3つの事業は相互に関連し、循環型の地域発展モデルをめざすものとして、独立後10年を経ても改善の歩みが遅々としている山間部農村の貧困に挑戦するものです。

【スリランカ】

スリランカの平和の定着をめざして2004年から北部ジャフナでの活動を開始しており、2010年からは南部での活動も加えました。2012年に北部での活動の重点を思い切ってムライティブ県に移しました。ムライティブ県は2009年5月に政府軍の圧勝で内戦が終了した際に最後の戦闘が数か月間続いた地域で、住民の多くは内戦によって家族の誰かを失っており、2011年以降にようやく難民キャンプや各地の避難先から帰還できましたが、今も政府軍の存在が大きく、帰還した住民は緊張を強いられています。パルシックは、2012年度にムライティブ県で漁業再建支援として漁具の提供などを行い、2013年度以降に本格的な復興支援を開始する計画です。ジャフナ県の各地でも内戦や津波で夫を失った寡婦世帯のための干物づくり支援を継続しています。そして北部と南部の女性をつなぐ事業として南部の女性の古着のサリーを北部の女性がバッグやブラウスにリメイクして生計向上につなげるリサイクル事業を開始しました。南部デニヤヤでの小規模紅茶農家支援は2012年度にアールグレイ紅茶の商品化にこぎつけ、パルシックのスリランカでの活動は大きく広がりました。

【東日本大震災被災者支援】

主に宮城県石巻市での緊急支援事業としての物資配布、在宅被災者支援としてのおちゃっこ事業（被災者の寄合所を作り、食事を提供）に続けて、2012年は同じ石巻市でも北の外れの漁村地帯北上町における復興支援に集中しました。そして漁業支援と並行して仮設にお住いの高齢女性たちによる農業の支援を開始し、この地域に伝わる伝統料理と、それをつくるお母さんたちと新しい出会いがあった年でした。並行して復興応援隊という制度を活用して住宅移転や子供のケアなどの分野の支援も拡大して、これから3年間の北上町の復興への歩みを住民の方々と共に担っていくことにしました。

【マレーシア】

スリランカや東ティモールでの事業とは異なり、マレーシアではパルシック事務所は設けずに、ペナン州の沿岸小漁民の組織をカウンターパートとして、パルシックらしく人と人との出会いと交流を中心に沿岸小漁民の環境保全活動を支援するという活動の性格をはっきりさせて継続しています。

【東京事務所】

アジア太平洋資料センター（PARC）の事務局の一角で活動を開始しましたが手狭になってきたので、思い切って同じ建物の1階を借りて改装しました。ボランティアの手を借りて内装を行ない、木の香りのする事務所でインターンを含め常時6名の事務局員が仕事をしやすい環境が整いました。

同時にこの機会に、表通りに面した一角を店舗に改装。大変ささやかなスペースですが、「淡路町マルシェ」と名付けて、フェアトレード商品であるコーヒーや紅茶、東北の支援の一環としてワカメや水産物、福島の女性たちが作っているクッキー、友人たちがつくった有機野菜を並べました。ポスト3・11の日本のあり方へのパルシックの理念を形にしつつ、地域に開かれた事務所とする一歩でもありました。

東京事務局の重要な課題であるフェアトレード商品の市場を広げるという活動でも2012年度は高級食品店チェーンに商品を置いていただき、アクセスしやすくするという点で重要な一歩を踏み出しました。

パルシック理事会

井上礼子・中村尚司・清水 研
鈴木直樹・永田洋子・穂坂光彦

循環型農業プロジェクトを開始

2007年以降、東ティモールではインフラ整備が急速に進みました。重油発電所が建設され、国内の主要な街に24時間電気が灯ようになりました。首都デシリから東西南に延びる国道は、それぞれ日本、アジア開発銀行、世界銀行からの借款で道幅が9メートルに補修拡張される予定です。開発が、農村の人びとの目にも近いところにやってきました。彼ら自身はいまだに電気も水道もない集落から、徒歩や馬で街の市場までやってきます。若者の農村離れも目につきます。

パルシックは、これからの10年は農村の生活改善に総合的に取り組もうと、2012年7月、アイナロ県マウベシ郡で森林保全と循環型農業プロジェクトを開始しました。

まずは日々の煮炊きに使用する薪の使用状況の改善です。村人の薪の使用量、どのくらいの頻度でどこから収集してくるのかを調べました。中には毎日収集に行くという家庭もありますが、使用量を減らすという発想はありません。乾季にまとまった薪を収集し保管しておける薪貯蔵庫を各戸につくり、熱効率のよいかまどを普及させていく予定です。

同時に薪に使用する木、収入につながる木の調査も行いました。村人が収入源として依存しているコーヒー生産。コーヒーの木の日陰樹として植えられているモクマオウが薪としても多用されていることがわかりました。その一方、かんきつ類、アボガド、マンゴー、ジャックフルーツなど果樹へのニーズが高いこともわかり、これらの苗を東ティモール政府農水省やデシリ近郊の植木組合から調達し、計5,000本強を植えました。また2013年2月には日本から専門家を招き、東ティモールに生息するアジアミツバチの養蜂について学びました。

次の課題は畜産技術の向上です。平地の極端に少ないマウベシでは牛の飼育はごく少数の農家に限られ、豚を各戸1～2頭飼っています。主に祭事の貯金という側面が強いため、畜産へと発展させ、収入向上につなげたいと考えています。

(この事業は日本 NGO 連携無償資金協力の助成を得て実施しました)

東ティモールにおけるパルシックの事業

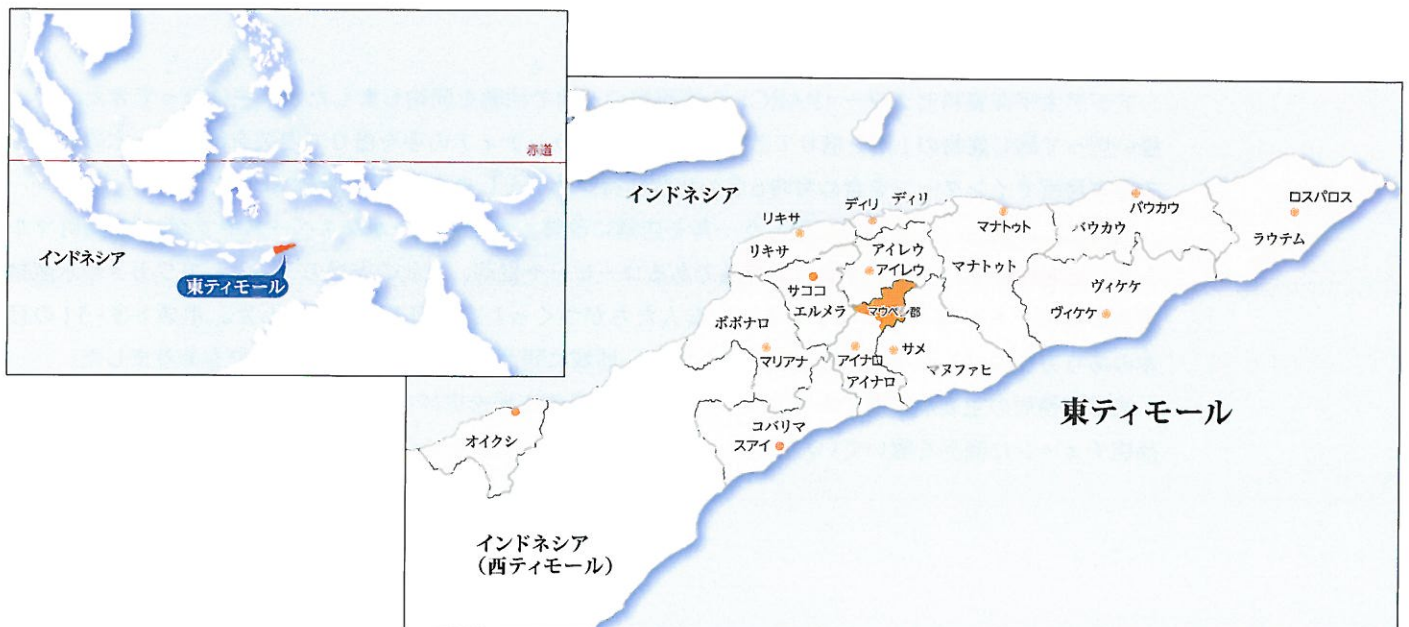
1. 森林保全と循環型農業
2. 女性による食品加工支援
3. コーヒー生産支援とフェアトレード



配布する前に苗木を確認



マウベシの多くの農家が飼っている豚を収入向上につなげる





ハーブティを納品に来たリタ集落の女性たち



ハーブティ検品の様子



ディリでの販売イベントにて

マウベシ女性による食品加工

アイナロ県マウベシ郡の5集落、44名がサツマイモチップス、はちみつ、ハーブティーの生産活動を続けています。2012年5月にはハーブティー3種を初めて日本へ輸出しました。自然の恵みをいっぱい受け、女性たちの手で丁寧に加工され、厳しい検品を通ったもののみをひとつずつ梱包し、まさに【メイド・オンリー・イン・マウベシ】の商品となりました。高品質のハーブを納品する女性たちは、長い道のりを徒歩でマウベシまで届けてくれます。コーヒー豊作もあってコーヒーの収穫・加工最盛期には女性たちもコーヒー収穫に忙しくハーブ収量が激減しましたが、一人当たり月平均\$10の収入となりました。輸出だけでなく、首都ディリにあるスーパーに卸し、国内販売にも力を入れています。

季節もののハチミツは、年間を通じて市場に供給できるよう生産量を増やして330ミリリットル入り1,300本を達成しました。約5か月間で得た収入は一人当たり平均\$250となりました。女性たちにこの収入の使途を聞いてみると、子供たちの学費や大学進学費用、自宅のソーラーパネル設置などに使っているとのこと。

また10月には活動をアピールしようと首都ディリで5日間行われたイベントに参加、商品プロモーションを女性グループのメンバー自らが行いました。近年、ディリでは東ティモール人の消費動向に明らかな変化が見られます。2012年12月に国連ミッションが完全撤退し、外国人が主な顧客だったスーパーに、今やかごをいっぱいにして買い物をする東ティモール人の姿が多く見られるようになりました。女性グループの自立をいっそう促進するため、2013年は女性たち主体の運営を目標とし、2月には全体会議にて2012年活動報告、2013年の目標設定、活動計画について話し合いました。リーダー養成研修を受けたスタッフを中心となって識字教育プログラムを開始する予定です。

(この事業の一部は国際協力NPO助成の助成を得て実施しました)

女性グループのメンバー マリア・エステラさんの1日 家族：夫、子供計13人

ある日のスケジュール

05:00	起床
05:00 - 06:00	薪で火を起こし、水汲み、昨夜の食器・器具洗い、朝食の用意、台所と家の掃き掃除
07:30	子供と夫朝食取る
08:00	朝食
09:00 - 10:00	洗濯
10:00 - 11:00	畑仕事
11:00 - 13:00	昼食準備
13:00 - 14:00	昼食
14:00 - 17:30	畑仕事
17:30 - 20:30	夕食準備、コーヒー用意

注：この地域は電気もガスも水道もきていないので食事の支度は水汲み、薪のたきつけを含む。



コーヒー生産者協同組合支援活動

マウベシコーヒー生産者組合（ココマウ）は、再建に汲々とした1年を経て2012年6月、2年ぶりの組合員総会を開催しました。新しい役員はおもに新規加入集落から選ばれ、東ティモール政府協同組合局のアドバイスで設置された教育委員会には、2003年からの古参メンバーが選ばれました。

エルメラ県サココのコーヒー生産者組合 KJHR は、コーヒーの加工作業、品質管理、計量までの管理を自分たちでやり遂げました。

選挙年だった2012年、東ティモールでは4月に大統領選が、7月には国政選挙が実施されました。結果はシャナナ首相の続投となり、8月には第5次政府が発足しました。新しい政府は協同組合育成に力を入れています。独立から10年を経て、東ティモールの経済発展基盤の一つである協同組合に、ようやく光が当てられました。10月には全国協同組合セミナーが、12月には全国の協同組合や農民グループを首都デリリに集め、協同組合トレーニングが実施されました。ココマウと KJHR もここで顔を合わせ、各地の取り組みに大いに刺激を受けました。

こうした変化を追い風にできるか。ココマウも KJHR も2012年はコーヒーの豊作に喜びました。ココマウは15集落302世帯の組合員とアラビカコーヒーを生豆で100トン生産し、財政的自立の前提として試算していた規模に達しました。2013年1月に開催した組合員総会では、事務所建設用地の確保やコーヒー加工資材のメンテナンス費用、組合員への貸付事業などが提案され、承認されました。KJHR は、サココ集落の130世帯の組合員がロブスタコーヒー30トンを生産し、このうち7トンフェアトレード市場に出荷しました。ここから入るソーシャルプレミアムをモバイルクリニック資金とし、地域への社会貢献により一層力を入れる計画です。

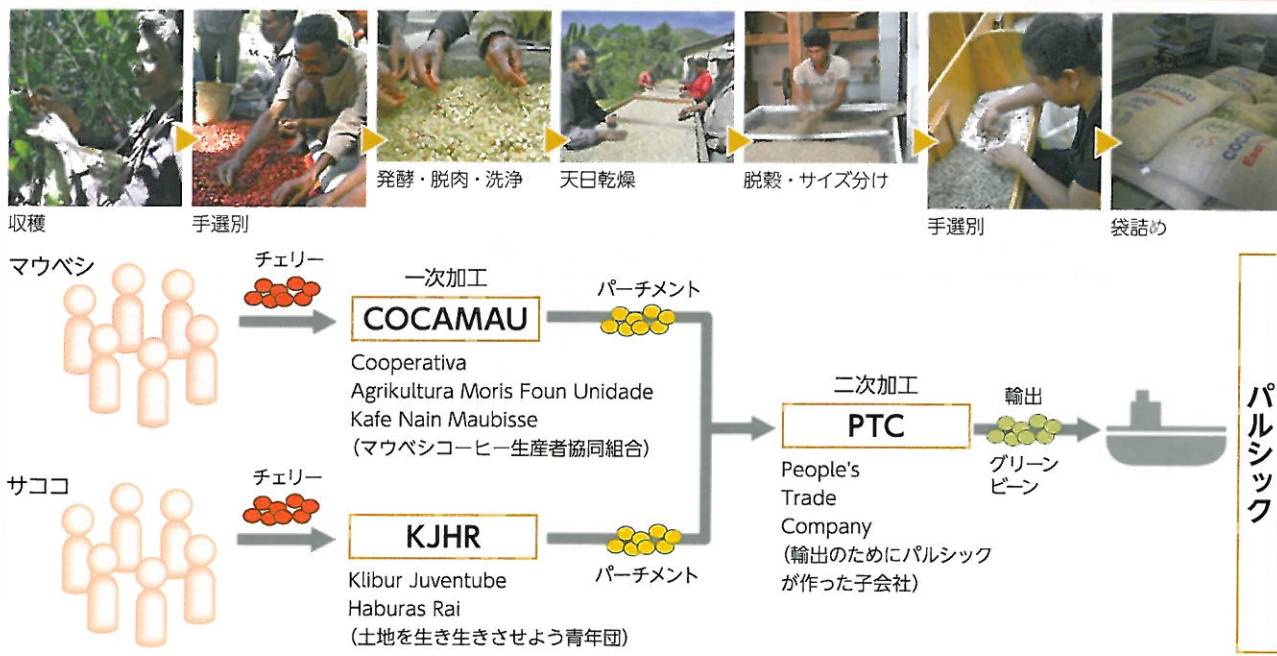
(この事業は6月まで JICA 草の根技術協力事業パートナー型の支援を得て実施しました)



表1 コカマウ(COCAMAU) 組合員数
2012年

村	集落	正組合員	準組合員	小計
アイトウト	クロロ	19	26	45
	マウレフォ	19	16	35
	ベトゥララ	5	9	14
マウベシ	レポテロ	9	13	22
	リティマ	10	9	19
マネットウ	ルスラウ	7	0	7
	ハヒタリ	15	0	15
	マウライ	36	0	36
	レブルリ	15	0	15
マウラウ	ケリコリ	22	0	22
	リタ	40	0	40
	ルムルリ	42	23	65
エディ	ハトゥカデ	24	9	33
	ロビボ	6	7	13
	タラレ	33		33
組合員数 合計		302	112	414

コーヒーができるまで





「東ティモール独立10周年記念フェスタ」でのライブ



東ティモールコーヒーを販売する3団体で共同してコーヒーを出しました



東ティモールでも記念イベントが開催されました。大統領府で行われる独立式典を見守る人々

独立10周年を祝う

2012年5月、東ティモールの主権回復から10年が経つことを記念し、主権回復当時から共に活動してきた日本国内の団体、個人が集まり、記念イベント「東ティモール独立10周年記念フェスタ」を開催しました。「Balibo(バリボ)」、「カンタ！ティモール」など、東ティモールを扱う各国の映像作品の上映の他、東ティモール人歌手エゴ・レモスさんによるライブ、東ティモールで活躍される方々のトークなどが5月19日、20日の2日間にわたって行われ、延べ約300名の方々と共に10周年を祝いました。写真展やセミナー、日本各地でのイベントが連動して行われました。

「記念フェスタ」前夜の5月18日には、アジア太平洋資料センター(PARC)と共催で、シンポジウムを開催しました。独立前から東ティモールに関わっておられる、大阪東ティモール協会事務局長・松野明久さん、東京女子大学教授・古沢希代子さん、シェア=国際保健協力市民の会代表理事・本田徹さんをゲストスピーカーにお招きし、この10年の変化、現在の課題を、行政や保健衛生の観点から語っていただきました。10年が経ち変化する政治家の姿勢や、その一方で、今も変わらない妊産婦死亡率の高さなど、同国に長年関わられてきた方々ならではの視点で、東ティモールの現在を理解するための課題が語られました。

東ティモール現地でも独立10周年は盛大に祝われました。この5月20日を迎える午前0時、大統領就任式が行われました。ラモス・ホルタ前大統領を決選投票で破ったタウル・マタン・ルアク前国軍司令官が大統領として就任したのです。タシトルというディリ中心地から少し離れた大きな広場が会場となり、コンサートと式典の2ステージが設置され、前夜8時から伝統舞踊、ロックバンドのコンサートなどが行われ、若者を中心とした大勢の人で盛り上がりました。夜が更けるにつれ、続々と集まるポルトガル・インドネシア大統領ら国賓・各国大使・待客。午前0時になると国旗掲揚、国歌斉唱、前大統領のラモス・ホルタ氏、国会議長のラサマ氏のスピーチに続き、署名式が行われ正式にルアク大統領が就任し、演説をしました。「一生懸命仕事を！」という言葉が演説中何度も出てきたということです。

表2 東ティモール母子保健状況の変化

	東ティモール		備考 ³
	2002 ¹	2010 ²	
出生率	7.8人	5.7人	アジア第一位
5歳未満児死亡率 ⁴	126人	64人	日本：3人 カンボジア：88人
乳児(1歳未満)死亡率 ⁵	—	45人	日本：3人 カンボジア：68人
妊産婦死亡率 ⁶	660人	557人	日本：6人 カンボジア：290人
医療従事者の介助による出産の比率	—	30%	日本：100% カンボジア：44%
伝統的助産師が付き添う出産の比率	—	18%	—
産後の健診受診率	—	32%	—
低体重 ⁷ および重度の低体重の5歳未満児	43%	45%	カンボジア：29%
BMI ⁸ が18.5未満の栄養不良の女性	—	27%	—
15歳から49歳の貧血症～重度の貧血症	—	44%	—

特定非営利活動法人シェア=国際保健協力市民の会「Bon Partage No 152」より引用

- 1 ユニセフ世界子ども白書2004より
- 2 Demographic and Health survey 2009-2010(東ティモール統計局)
- 3 ユニセフ子ども白書2011より抜粋
※上記2との単純な比較はできません。
- 4 出生1,000人当たり
- 5 出生1,000人当たり
- 6 出産10万人あたり、妊娠関連の原因で死亡する女性の年間人数
- 7 低体重：世界保健機関(WHO)の「WHO Child Growth Standards」の基準による年齢相応の体重の中央値からの標準偏差がマイナス2未満である生後0～59ヶ月児の割合
- 8 BMI(Body Mass Index) 体重と身長の関係から算出される体格指数。WHOでは25以上を「標準以上」、30以上を「肥満」、18.5以下は低体重とされる。

スリランカ北部緊急人道支援事業の終了

2009年5月に内戦が終了しました。23年間に及んだ内戦は住民たちにさまざまな影響を及ぼしました。北部州の人口は約100万人とされていますが、そのうち28万人を超す人々が難民キャンプに收容されたのです。ジャフナ県の出身者でも内戦が激化したときにムライティブなどに逃れ、そこで再び難民となった人々も多くいます。パルシックは内戦が終わると先ずジャフナにできた難民キャンプに食料を配布しました。続けて漁師たちが漁業を再開できるように漁具支援をジャフナからムライティブへと続けてきました。

2012年3月1日から12月31日まで、北部州ムライティブ県で、帰還漁民の生活再建のための事業を実施しました。ムライティブ県は、内戦の最終段階まで政府軍とLTTE(タミルイーラム・解放のトラ)の戦いが繰り広げられ、2009年の内戦終結後、人々が帰還できるようになるまで最も時間がかかった地域の一つです。2012年12月現在も、軍が土地を占拠しているなどの理由で、元の居住地に戻れていない人々があります。パルシックは村に帰還した漁民たちがすぐに漁を再開できるように、漁船、エンジン、漁網を配布しました。漁具の資金の一部を利用者が漁協に返済する「リボルビング・スキーム」を導入し、この返済金を元手に未だ漁具のない人が漁具を得られるようにします。2009年8月から3年4ヶ月間にわたって実施したスリランカ北部緊急復興支援事業は、2012年12月をもって終了しました。今後は、様々な形態のコミュニティの復興支援に移行します。

(この事業はジャパン・プラットフォームの支援によって実施しました)

スリランカにおけるパルシックの事業

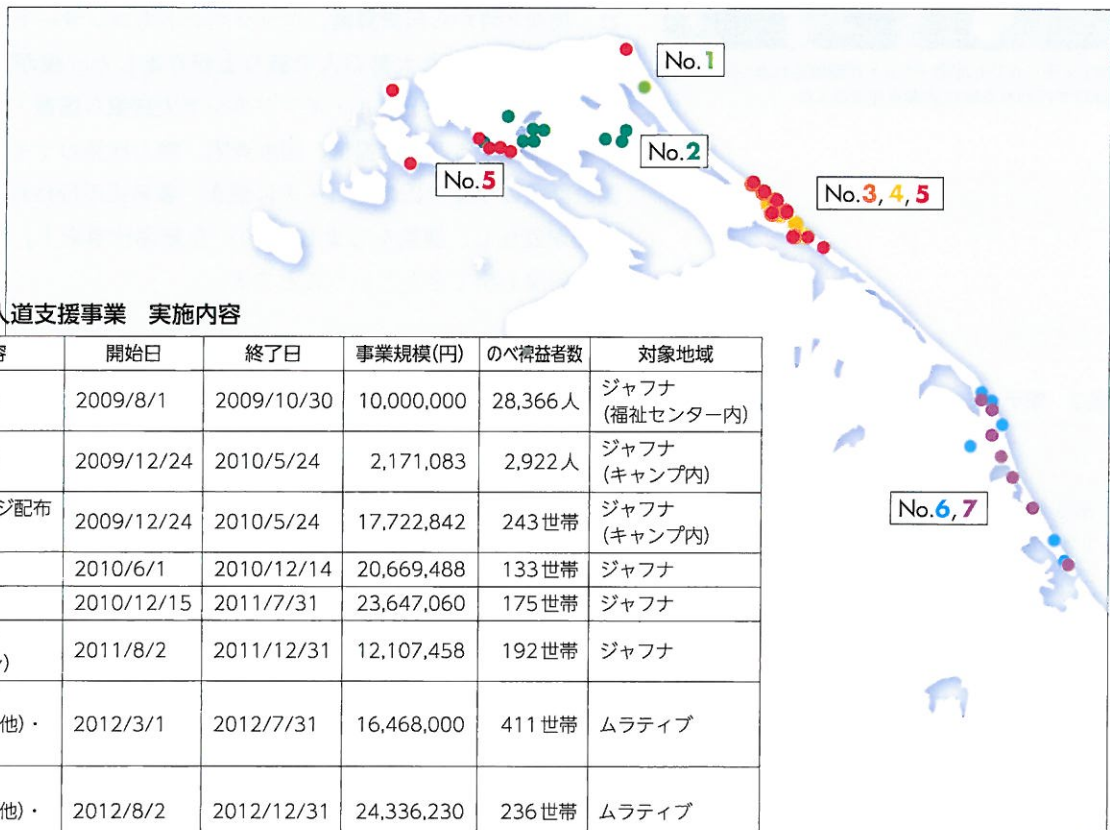
1. 北部緊急人道支援 (ムライティブ)
2. 女性による乾燥魚づくり支援 (ジャフナ)
3. 紅茶の有機栽培転換支援とフェアトレード (南部デニヤヤ)
4. 南北の女性をつなぐサリーリサイクル



帰還民は今も自分でつくった仮設住居で暮らす



パルシックは漁に出るための船を提供



スリランカ北部人道支援事業 実施内容

No.	事業内容	開始日	終了日	事業規模(円)	のべ裨益者数	対象地域
1	補完食料配布	2009/8/1	2009/10/30	10,000,000	28,366人	ジャフナ (福祉センター内)
2	補完食料配布	2009/12/24	2010/5/24	2,171,083	2,922人	ジャフナ (キャンプ内)
2	生計パッケージ配布 (漁具等)	2009/12/24	2010/5/24	17,722,842	243世帯	ジャフナ (キャンプ内)
3	漁具配布	2010/6/1	2010/12/14	20,669,488	133世帯	ジャフナ
4	漁具配布	2010/12/15	2011/7/31	23,647,060	175世帯	ジャフナ
5	生計物資配布 (漁具、ミシン)	2011/8/2	2011/12/31	12,107,458	192世帯	ジャフナ
6	生計物資配布 (漁具、ミシン他)・研修	2012/3/1	2012/7/31	16,468,000	411世帯	ムライティブ
7	生計物資配布 (漁具、ミシン他)・研修	2012/8/2	2012/12/31	24,336,230	236世帯	ムライティブ

＊女性メンバー紹介＊



アンジェリーナ
(ヴェラナイ・グループ)

干しえびを作っているヴェラナイ・グループの中心的存在です。結婚前にもジャフナのえび加工工場で働いたことがあり、えびの扱い、その他干物作りにも慣れてしています。干しえびにとどまらず、家では乾燥唐辛子を作って販売したりと、働き者のお母さんです。



アヌーシャ
(ウドウトゥライ)

25歳の若いシングルマザーです。両親のもとで4歳の一人息子を育てています。干物事業に参加して初めて自分で収入を得られるようになりました。2011年には自分の稼いで息子の誕生日を祝うことができた喜び、2012年には干物の収入で自分の土地を買うことができたそうです。



ニラ
(マナッカドゥ)

マナッカドゥ・グループの中心的存在で、マナッカドゥ漁協の役員の仕事も引き受けています。夫は消息不明でその生死すら分かりません。4人の子どもを育てながら様々な仕事をこなし、たくましく生きているジャフナ漁村女性の一人です。



サンディー
(トゥンプライ・イースト)

漁村に生まれ、若い頃から干物作りを行ってきました。トゥンプライ・グループのグループ活動は止まってしまいましたが、今は個人で干物作りを行っています。家では夫が病気で漁に出られないことから、干物作りの仕事で家計を支えています。

ジャフナ乾燥魚事業、3年目を迎えて

乾燥魚事業開始から2年半が経とうとしています。2012年には新たに、ヴァダマラッチ・イースト郡のカッタカドゥ村が事業地に加わりました。内戦の被害を受けた村で、2011年7月になってようやく住民の帰還が許され、帰還がひと段落した後で村の女性たちが支援を求めてきて事業を実施することになりました。

この2年半の間に、パルシクの乾燥魚事業はジャフナ内である程度知られるようになり、他のNGOや国連機関、行政機関から同様の事業を実施したいので話を聞きたい、事業地を訪問したい、研修の講師をしてほしい、マニュアルがほしいなどの問い合わせを受け、できるかぎり依頼に応えるようになってきました。しかし、他団体の事業では半年や1年間の事業終了後に女性たちの活動が止まってしまい、収入向上につながっていないという話をたびたび耳にしています。

実際、これまでの活動を振り返るとき、大変だったことはマニュアルを作ることや研修を実施することではなく、定期的に事業地を訪問して女性たちの製品の品質を確認し、根気強く会計の確認、指導をするという継続的なモニタリングの実施や、女性たちの製品をより高値で安定的に販売できるように信頼できる販売先を探し、販売先との関係を構築していくというマーケティングの部分でした。今も販売先の確保には苦労しています。こうした活動は短期間では完結できず腰を据えての取り組みが必要です。中期間の継続的な取り組みがあって、ようやく各グループの収入が上がり、これまでグループに入っていなかった近隣の寡婦の女性たちからもグループに加わりたいとの声を聞くようになりました。

事業の最後の半年間は、女性グループが継続的に自立して活動できるようにグループとしての登録をするとともに、収入の向上を図り、新たに寡婦女性が加わるようにしたいと考えています。合わせて、活動の目的やこれまでの成果、今後も活動を継続することの意義を共有し、女性たちのグループ内での連帯を強められるよう定期的な会合を持っていく予定です。販売面では、昨年11月末にジャフナ市内にある組合局の土地に、女性たちの干物を販売するお店を開店しました。これにより、お客さんが増えればと期待しています。

(この事業はJICA草の根技術協力事業パートナー型の支援を受けて実施しました)



乾燥魚事業の進捗を報告しました

ジャフナ乾燥魚事業報告会

11月29日、ジャフナ県乾燥魚プロジェクトの事業報告会を実施しました。現地駐在員西森光子からの進捗状況報告に加え、京都大学教授・田中雅一さん、首都大学東京教授・高桑史子さんをお招きし、内戦中から現在にいたるまでのスリランカ各地の漁村の変遷をお話いただきました。戦前は民族の違いによらず、季節ごとに漁場を行き交い、多くの場合互いの言葉も理解していた漁民たち。紛争によって生み出された民族の対立、破壊されたインフラや偏った開発のために不安定な状態となった漁村の姿が明らかにされました。多民族が共生するスリランカ社会を取りもどすために必要なことは何かを考える、貴重な機会となりました。

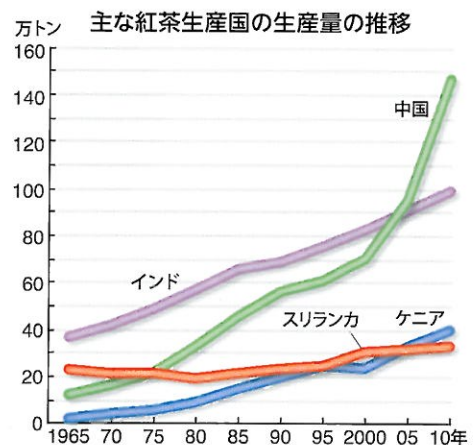
デニヤヤで有機栽培紅茶生産中

スリランカでの有機紅茶生産は、他の紅茶生産大国に比べると遅れをとっています。しかし近年、輸出先の政情不安定への対処、国際市場での競争力の強化を目的に、付加価値紅茶に力を入れ始めました。そして付加価値紅茶の一つとして有機栽培紅茶への注目が高まっています。また、スリランカでの農業全般において、農薬による深刻な健康・環境被害を抑えるため、政策として有機もしくは低農薬農業への移行の試みが活発になっています。

2011年から南部州デニヤヤ周辺農村の紅茶農家25世帯を対象に開始した有機紅茶栽培事業は、2012年度には新たに25世帯を同地域から迎え、規模を拡大して事業を進めてきました。今年度は、参加農家全員でヌワラエリヤ県にある国立紅茶研究所を訪問し、土壌改良方法や苗の管理などを学びました。また、茶葉の加工依頼をしているアヒンサ有機紅茶工場にて、品質のよい茶を作るための茶摘み・茶摘み後の茶葉管理（一時保管や輸送）についての研修を受け、少しずつではありますが、茶葉の品質が向上してきています。

パルシックは、2012年7月から共同出荷グループの茶葉を購入し始めました。週に1度、生茶葉をアヒンサ有機紅茶工場へ運び、生茶葉から荒茶（等級分けなどがされる前の紅茶）への加工をしています。7月から12月までに約10トンの生茶葉を出荷し、約2,000kgの荒茶を生産しました。このうち1,600kgの紅茶をコロomboにある紅茶輸出会社へ運び、ベルガモット香料で香り付けをしてアールグレイ紅茶に加工し、包装して2013年2月に日本へ輸出しました。日本で4月からフェアトレード紅茶として販売開始の予定です。また一部は、スリランカ国内でも販売する準備をしています。

(この事業は国際ボランティア貯金の助成を得て実施しました)



デニヤヤ・アールグレイ紅茶ができるまで



1. 畑・土作り
化学肥料、除草剤の過剰使用で疲弊した土壌を、牛の糞などから作る堆肥を利用して改良します。

2. 茶摘み

スリランカは熱帯のため、新芽を摘んだ後、1週間ですぐに次の新芽が出て茶摘みができます（日本では茶摘みは1年に1度です）。スリランカでの茶摘みは手摘みがほとんどです。

3. 共同出荷



週1回、有機転換茶畑から新芽を摘んで共同出荷します。それぞれのメンバーが収集地点まで茶葉を運び、重さを測定し記録します。

4. 工場での一次加工





コロンボ事務所に集まったサリー



サリーを加工する女性

南北の女性をつなぐサリーリサイクル

2012年からスリランカの北と南をつなぐリサイクル・サリープロジェクトが始動しました。北部の寡婦世帯の自立を支援し、さらに南部の女性に北部の様子を伝え、南北の女性たちのつながりで平和構築に貢献しようという試みです。コロンボなど南の女性から不要なサリーを集め、そのサリーをジャフナの女性がブラウスやバッグにリメイクして日本やコロンボで販売、その売り上げがジャフナの女性の収入となります。これまでに古着のサリーは250枚以上が集まっています。学校のイベントや紅茶輸出会社、他のNGOの知人からサリーを集め始めました。また現地英語紙で活動が取り上げられてからは、コロンボをはじめ南はマータラの女性からも集まっています。高齢の女性からはご主人が亡くなったのでもう明るい色は着られないと赤やピンクのサリー、毎日学校にサリーを着ていく先生からは日常着のサリーなどが寄付されています。サリーを回収する際にお宅を訪問すると、昔の写真をを見せていただいたり、製品の販路のアドバイスをいただいたり、サリーをもらうだけではなく素敵な出会いがたくさんありました。

南でサリーを回収すると同時に、女性たちが質の良い商品を作るようデザインやパタン作成の協力者探しを進めてきました。またジャフナではプロジェクト参加女性を対象に縫製トレーニングを始めようとしているところです。古着サリーをリメイクするジャフナの女性たちの多くは、内戦や津波で夫を亡くしていたり、今も夫が政府の元LTTE兵の更生施設 (rehabilitation centre) にいたり、夫と一緒に暮らせず自らの収入で家族を養っています。シンプルな縫製でいてコロンボや日本のおしゃれな女性にも好まれるような衣類へと作りかえることで、収入増をめざします。

工場に運ばれた生茶葉はすぐに一次加工工程にかけられて、翌日の午後には紅茶になります。

- ①茶葉が工場に到着したら、まず品質を確認するためのサンプリングチェックをします。
- ②萎凋 (いちよう) : 生茶葉に熱風を当てしおらせる工程。一晩かけて水分を飛ばし、茶葉の量が元の50~60%になります。



- ③揉捻 (じゅうねん) : しおらせた茶葉を揉捻機を使って揉み、細胞を壊して、酸化発酵を促します。
- ④玉解き・ふるい: 揉捻機にかけられた茶葉は、ほぐされ、ふるいにかけて大きさを揃えます。揉捻が十分でなかった茶葉は再び揉捻機にかけられます。2~3回この【揉捻→玉解き・ふるい】の工程を繰り返します。
- ⑤発酵 (はっこう) : 気温と湿度を管理して茶葉を酸化発酵します。天候などによる微調整がされますが、だいたい2~3時間かかります。
- ⑥乾燥: 適度に発酵された茶葉は、発酵を止めるために乾燥機に入れられ、約210度の高温で乾燥されます。
- ⑦等級分け: 荒茶は繊維やホコリを取り除かれ、大きさ・重さ・色で分類され、OPやBOPなどの等級に分けられます。

パッキングされた紅茶は、輸送コンテナに載せられてコロンボ港を出ます。



工場で一次加工・ブレンドされた紅茶は、コロンボの輸出会社に送られます。そこで、アールグレイ紅茶にするために天然のベルガモット (シトラス系の果物) から抽出したオイルを紅茶に振りかけて定着させます。その後、ティーバッグタイプは機械でティーバックに入れてから、リーフタイプはそのままパッケージに入れます。

2011年3月～5月末日

緊急支援活動（避難所への物資配布）
御用聞き活動

2011年7月～2012年3月

在宅被災者支援活動
●石巻市街地4拠点で交流センター「おちゃっこ」を開催
●食事の提供と交流

2011年10月～現在

漁村復興支援活動 石巻市北上町にて
●漁業復興支援
●町づくり委員会・高台移転のための住民ワークショップ開催支援
●仮設住民による農業支援

2011年秋から、東日本大震災被災者支援が、緊急支援から復興過程へと移行したのに伴って、パルシックは活動の重点を石巻市北上町に移してきました。ここは南三陸町と石巻市の間にあって交通の便も悪く、支援が少なかったからです。北上町は、1955年に十三浜村と橋浦村が合併して、北上村となり、さらに1962年に北上町となり、2005年の「平成の大合併」で桃生町、河南町、河北町、雄勝町、牡鹿町とともに石巻市の一部となりました。けれど住民たちの意識の上でも、産業や文化の上でも石巻市街地とは異なっています。さらに漁業地区である十三浜と内陸の橋浦でも異なっています。パルシックは先ず、十三浜地区のワカメ加工の支援を始めましたが、2012年には橋浦地区の住民を含む仮設居住者による農業支援を開始しました。

水産物販売支援とアンテナショップ開設

震災により甚大な被害を受けた石巻市北上町十三浜各浜で、ワカメ養殖を行う漁家を対象に、共同で利用できる共同作業場の建設やワカメ加工作業支援の為にボランティア派遣協力を行ってきました。宮城県漁業協同組合十三浜支所佐藤清吾運営委員長のお話では、震災後2年目になり、ワカメ養殖漁師数は震災前の9割近くまで戻ってきており、生産量はほぼ10割近くまで回復してきたということです。

徐々に北上町十三浜の漁業が復旧しつつある状況下、2012年度は、生産されたワカメの販売促進に向けた支援を実施しました。東京での食や環境に関するイベント、「アースガーデン秋」や「土と平和の祭典」へ参加する十三浜の漁師グループや水産加工業者に対して、販売ボランティアの派遣や準備のサポートなどの支援を行いました。両イベントでは、十三浜の漁師さんらが地元産ワカメやコンブなどの加工品について、調理方法など説明しながら販売し、いずれも完売で大盛況のうちに終了しました。

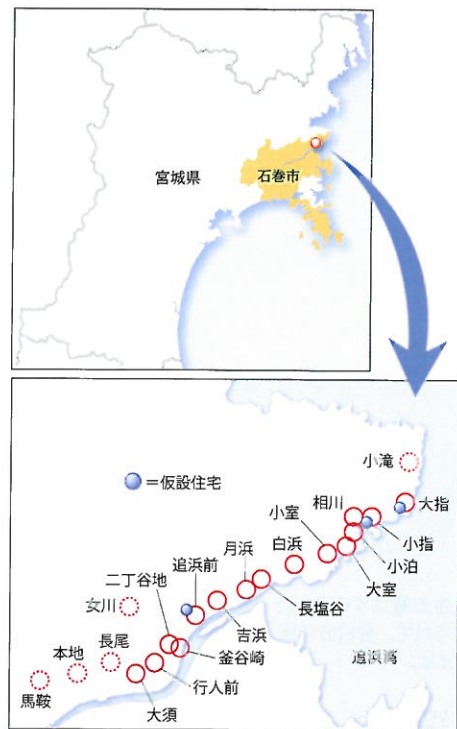
こうした十三浜産水産物の広報、宣伝や販売促進も継続的な活動が重要です。北上町の住民の方々や十三浜への訪問客からも、十三浜産水産物の購入を希望する声を多く聞くようになってきました。この動きを受け、県漁協北上町十三浜支所、石巻市北上地域物産振興協会の協力を得て、地元産の水産物を販売するアンテナショップを、被災した漁協十三浜支所跡地に建設・整備しています。

このアンテナショップは、十三浜の生鮮・加工水産物の販売や北上町全体の情報発信等を行う場をめざしています。実際の運営・管理は、アンテナショップに関心のある漁師さん有志グループが中心となって行う予定で、開店に向けその内容も現在検討中です。

（この事業は Give 2 Asia の助成を得て実施しました）

石巻市北上町におけるパルシックの事業

1. 水産物販売支援
2. 仮設居住者による農業支援
3. 復興応援隊



漁師さんグループも加わり、アンテナショップ内で使用するベンチ製作（2013年2月）



氷点下の寒さでもビニルハウスのつぼみ菜は収穫最盛期



にっこり団地の住民みんなで花壇にパンジーの苗を植え付け

仮設住宅居住者による農業支援

石巻市北上町十三浜にある仮設にっこりサンパーク団地の住民を対象に、北上中学校の畑や近隣の畑を借りて「にっこり団地農園」を始めました。津波で壊滅的な打撃を受けたこの地域では、自宅だけでなく、田畑も大きな被害を受けました。被災前から9割以上の人たちが農業にかかわっていましたが、畑の担い手である高齢者や女性たちから「畑仕事をしたい」という声が上がリ、希望者に畑を分配したり、共同で栽培したりしています。栽培している野菜や花は50種類以上……収穫物は各家庭で消費するほか、地域のイベントや仮設団地内や近くのお店などで、市価の半分以下の値段で販売しています。

この北上町では、住民同士が、海の物、畑の物を交換し合う文化が浸透しており、住民の多くはこれまで野菜など買ったことのなかったと言います。震災前から北上町には商店がほとんどありませんでした。農家ではなくても、裏庭や近所に畑を持っていて、大根がたくさん取れた時には分け合っており、あるいは漬物で保存して長く楽しんでいました。が、津波でこうした家庭菜園の多くも浸水し、規模が小さく営業用の農地ではないので国による復興支援も受けられません。また仮設住宅に移転したため元の農地に行けない人もいます。仮設住宅での生活になって、「初めてスーパーで野菜を買って、高いのに驚いた」という声を聞きました。

当初、「畑でとれるものはあげるか、もらう」「残った野菜は畑で腐らせるのが当たり前」「無人販売は知っているが北上にはそういう習慣はない」という声が多かったのですが、仮設団地の高齢者を中心に「形は不揃いでも、安くて新鮮ならありがたい」と喜ばれています。また、石巻市内の被災者就労支援のアンテナショップでも週1回野菜を販売しましたが、単身世帯用に小分けにした野菜が好評だったり、お月見の時期に、北上では“雑草”であるススキやガマの穂を販売して喜ばれたりしました。冬季はビニルハウスで育てた薬物野菜が飛ぶように売れて、予約待ち状態です。春に向け、野菜や花の苗をハウスで育てて地域の人たちに配布・販売する予定です。

1月に畑の隣に完成した仮設の休憩所兼直売所が、畑仕事や植物が好きな人のよりどころとなり、散歩の途中で立ち寄りたり、新鮮な野菜を買ったり……地元の人だけでなく、外から訪れる人たちも北上の自然と味を満喫できる場所になるとよいと考えています。

(この事業はジャパン・プラットフォームの助成を得て実施しました)

表3 北上町の各集落単位の人口と
行方不明者・死亡者数

単位：人

	行政区	人口 2010年	行方不明・ 死亡者数	人口 2012年
橋浦地区	本地	153	4	141
	大須	439	5	401
	長尾	254	6	232
	行人前	47	2	88
	釜谷崎	101	23	67
	二丁谷地	69	5	46
	女川	619	6	580
十三浜地区	追波	220	45	149
	吉浜	225	27	110
	月浜	227	49	160
	立神	75	21	42
	長塩谷	95	7	67
	白浜	161	27	112
	小室	112	2	98
	大室	191	15	146
	小泊	47	1	36
	相川	253	15	239
小指	92	4	70	
大指	183	1	175	
小滝	187	2	181	
総計	3,750	267	3,140	

注1 1世帯しか居住者のいない字(最小単位の地区)は、市の統計上人数を表示されておらず、2012年の人口は大須、長尾、女川、追波、小指に関してはその人数が含まれていないため数名の誤差がある。

注2 2010年の人口は国税調査、2012年の人口は石巻市の数字による。行方不明・死亡者数は2012年6月時点。

表4 東日本大震災被災者数(2013年2月28日現在)

単位：人

	人口	死者 (関連死を含む)	行方不明者	仮設住宅 居住者
全国	—	18,393	2,676	292,846
宮城県	2,348,165	10,378	1,310	42,940
石巻市	160,826	3,498	448	16,523
北上町	3,142	199	69	629

北上町復興応援隊を開始

復興応援隊は、宮城県が総務省の「復興支援員」制度を活用して設置した事業。被災地の地域づくり活動を市町村などと連携して取り組み、復興を目指して活動するために結成、地域住民の地域活動を支援します。2012年12月1日にこの事業を受託し、活動を始めました。

「石巻市北上地域まちづくり委員会」支援

石巻市は、合併による影響で旧町の行政サービス等が低下しないように、市長の付属機関という形で「まちづくり委員会」を設置しました。総合支所と市民（地域団体から1人ずつに市長から委嘱）と一緒にまちづくりを行ってきました。震災後、復興という一からのまちづくりに市民が主体的に参加できるように、2012年6月に再び誕生しました。この活動を、専門家派遣、分科会の設定、広報、記録などの面でサポートしています。

地域情報紙「北上かわらばん」発行

大震災で津波に襲われ全壊した北上総合支所。多くの職員を失いながらも業務量は増え続け、大切な復興に関する情報であっても、地域住民一人一人にくまなく平等に届くようにするには限界がありました。そこで、北上町の情報紙を作成し、行政委員（区長）の方々の力を借りながら毎月、北上住民に毎戸配布しています。

住宅再建支援

津波により住宅を喪失した人々は、安全な高台に移転することは決意しながらも住宅を再建する手立てに悩んでいます。そこで、どういった支援制度があるのか、住宅ローンは組めるのかなど、住宅再建計画に少しでも役立つような情報発信の準備や住宅ローンの勉強会（相談会）を開催しました。北上町は2013年3月から2014年度にかけて高台の造成工事に着手、住民は2014年度から住宅再建にますます焦り悩むことが想像されます。来年度も勉強会や相談会、情報発信など、さまざまな方法で支援を続けていきます。

子どもの学習・遊び支援

北上町には3つの小学校があります。このうちの2校は津波により全壊、現在は内陸にあり無事だった1校を間借りしている状態です。グラウンドも満足に使えない、遠足は行っていない、教室は段ボールで半分に仕切られていて隣のクラスの声が丸聞こえ……不自由な学校生活を強いられている子どもたちに、冬の遠足として日帰り温水プール、週に1度の楽しい英会話教室、地域のジュニアリーダー活動の機会づくりなどを行っています。

地域活動支援

北上住民が自発的に地域のために行おうとしている活動をお手伝いしています。北上物産振興協会主催の「復興市」開催、十三浜南部神楽や十三浜春祈禱（獅子舞）などの文化復興、子どもの遊び場づくりを行うWE ARE ONE北上などの地域グループの活動支援など、さまざまな活動をサポートしてきました。



かわらばんを配布する復興応援隊員



「北上かわらばん」



2012年末に北上中学校体育館で開催した復興市

沿岸小漁民による水産資源保全活動支援

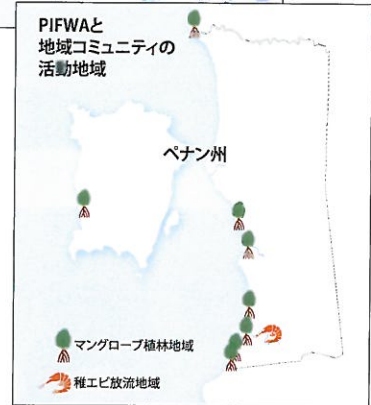
パルシックがマレーシア国ペナン州で2010年度年から支援をしてきた「マングローブ教育センター」の設備が整い、津波防御や環境保全のための植林活動だけでなく、マングローブの種の再生に努めています。現地のカウンターパート、Penang Inshore Fishermen's Welfare Association (PIFWA) は、教育センター周辺での企業や学校、地域団体と植林をすると同時に、マングローブの種子や活動の様子を展示し、PIFWAの活動への理解を促進しています。代表イリヤスさんは、政府の森林省から、マングローブ保全に関する全国会議への参加など、アドバイスを求められるようになりました。

2012年度は、PIFWAが地元漁民を対象にしたワークショップにパルシックも参加しました。内容は、地元漁民にペナン州全体の環境問題を理解してもらい、PIFWAの活動の原点である漁民の権利を実現するための方法を考えさせるものでした。女性や若い世代の漁民、また、植林に参加した近隣の学生など約50名が、グループワーク、ロールプレイを行い、パルシックも活動の紹介を行いました。

ペナン島が津波被害にあった2005年以降、特に、マングローブの植林事業での実績が社会的に認められ、PIFWAは漁民同士のエンパワーメントに力を入れようとしています。マングローブ植林後の環境変化のモニタリングや、ペナン州内外の他の漁村での聞き取り、ワークショップを積極的に展開しようとしています。

2月には、PIFWAが協力して植林を行ったペラ州のクアラ・グラ地域の漁民団体を、スタディツアー参加者、PIFWAメンバーと一緒に訪問しました。この地域の女性たちは、マングローブの植林だけでなく自ら海産物の加工や手芸工芸を始め、副収入を得るようになりました。今後、他地域の漁民と学び合いながら活動を進めていこうとしています。

上：カニ漁をして生計を立てる PIFWA メンバー、スレイマンさん
下：植林のために集めたマングローブの苗木



イリアス・ビン・シャフィー (Ilias Bin Shafie) さん PIFWA代表

1980年代にトロール漁船が沿岸の水産資源を根こそぎにしてしまうなど、沿岸小漁民にとって深刻な環境問題が発生し、PIFWAはその抗議の中から形成されました。当時の会長はハッジさん。その後、ハッジさんが急逝されて、イリアスさんは後を継ぎました。温かな性格のイリアスさんは、政府への抗議を継続する一方で、自分たちでも環境改善のために働かねば、と2000年ころからマングローブ植林を始めました。イリアスさんは、「マングローブ植林を12年間やってきて、カニや巻貝などが増えてきたことを実感する。漁師たちもマングローブが大事ということは知っている。この活動を通じてマングローブを増やすだけでなく、漁民の収入をふやすことに繋がりたい」と語っています。イリアスさんは、ご自宅の庭先で、干潟でタコをと



る伝統的な漁法を楽しそうに私たちにを見せてくれて、こうした伝統的な漁法も守っていきたくないと語りました。イリアスさんは、PIFWAの活動をもっと多くのペナンの沿岸漁民たちに広げたいので、そのための交通費やワークショップの経費を支援してほしいと希望しています。

2012年度は、各事業地との交流を深めると同時に、パルシック支援者の方々の層を広げることを目的として、ツアー企画に力を入れました。5件のツアーを企画し、4件を催行しました。ツアーに参加された方たちに感想を書いていただきました。



スリランカ ジャフナツアー

スリランカ・ジャフナ 復興に取り組む漁村の人びとと触れ合う旅
2012年7月15日～21日

スリランカの復興の様子を福島の復興に繋げたい、スリランカ・ジャフナに行ってみたい、と5人の女性が参加しました。ジャフナでは、パルシックが行っている乾燥魚事業の加工場で、海老や魚を「切る」「ゆでる」「干す」現場を見学しました。戦争の爪痕が残る町の様子を見て、現地の方に話を聞く中で、内戦・津波の被害から復興に向かっているスリランカと、津波・原発事故から復興に向かっている福島と、立ち向かう姿勢は同じだと思いました。(高城菜奈子さん)



東ティモールツアー

東ティモール フェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅
2012年8月4日～12日

私は北海道から今回のツアーに参加しました。ツアーの参加者は合計11名。皆さん笑顔が素敵で、集落では生産者とすぐに打ち解けて、子供たちと良く遊んでいました。東ティモールで人気の歌手、エゴ・レモスさんの「TO'OS NA'IN」を覚えて行き、集落で歌うと大合唱になりました。「カフェ・マナス・コプイーダ (一杯の熱いコーヒー)」という「熱いコーヒーを飲んで働く」という、まさに、コーヒー生産者の歌を現地の人たちと共に唱えたところが良い思い出です。都市と地方の格差についてなど、多くの課題を抱えていると聞きましたが、フェアトレードコーヒーが東ティモールの人々の希望につながりますようにと願っています。(荒井久代さん)



スリランカ 南部ルフナツアー

スリランカ・南部ルフナ 有機紅茶をつくる人びとを訪ねる旅
2013年1月5日～10日

ティーバッグや缶、PETボトルに姿を変える前の“紅茶”を体感できるツアーでした。紅茶＝プランテーションのイメージが強いですが、デニヤヤで訪れたのは3軒の小規模農家。そこで茶葉以外の、バナナやココナッツなど多くの植物と出会い、肥料作りや日々の農場管理などの苦労や後継ぎの問題が語られました。そして集会で目にしたのは、皆さんの有機への強い決意と日本への期待でした。同時に、紅茶の旅の終点・私たち消費者について考えさせられる旅でもありました。(猪岡保彦さん)

マレーシア・ペナン 沿岸小漁民とともにマングローブを植える旅
2013年2月11日～15日

マングローブの種の採取、苗の育成場の見学、そしてどろんこになりながらの植林。漁民の皆さんの指導のもと、マングローブ植林の一連の流れを体験しました。私たちが植えた苗は計100本。微々たる数ではありますが、苗はそのうち生長し、海洋生物の住処となり、海の浄化にも役立つでしょう。その日が楽しみです。生活習慣が異なるマレー人宅でのホームステイや村人たちが集う小さな食堂での食事などを通して、現地の生活を肌で感じる事ができたのもよかったです。漁民の皆さんとともに川にボートで繰り出し、豊かな自然の中で珍しい鳥獣を観察したのも楽しい体験でした。(奥野由美子さん)



マレーシアツアー

フェアトレード

パルシックはフェアトレードを「地球上に暮らす人々が、対等、平等に生きることのできる社会を作りあげていくためのプロセス」と考えています。人間的な交流と信頼に基づいた直接的な取引を行い、東ティモールやスリランカの生産者と日本の消費者をつなげる橋渡しをします。

2012年度は、営業ボランティアやインターンスタッフの力を借りながら、営業活動・広報活動を強化しました。その結果、小売店やオンラインショップで新規取引が始まり、より広い層の方々に商品を知って頂く機会を得ました。しかしながら「パルシック財政の柱になる」という課題は残ります。2013年度はコーヒー生豆、アールグレイ紅茶の在庫も増えますので、引き続き、チャレンジを続けていきたいと思えます。

カフェ・ティモール 今年は全国の焙煎店への生豆の営業を強化しました。その甲斐もあり、福岡から北海道まで、新しい出会いに恵まれ、全国のお客さまに東ティモールのコーヒーを知って頂く事ができました。また少量の生豆と家庭用の小型焙煎器のセット販売を始めた事により、個人のお客さまにもご家庭で自分だけのコーヒーを楽しんで頂けるようなアプローチを始めました。

まろやかでコクのある「カフェ・ティモール」はリピーターのお客様も多く、パルシック看板商品として定着してきました。営業の結果、小売店やwebショップでの新規取り扱いが始まり、コーヒーの売上は昨年比で1.5倍以上になりました。2013年はコーヒーの入荷が増え、在庫が過去最大になります。コーヒーの背景にあるストーリーと共に、商品の魅力をより多くの方に知って頂けるよう努めます。

ウバ紅茶 ウバのグリーンフィールド茶園が有機栽培で生産した、まろやかで飽きのこない味わいのウバ紅茶も、引き続き多くの方に楽しんで頂けるように販売を続けていきます。

アールグレイ紅茶 スリランカ南部州デニヤヤより「アールグレイ紅茶」が3月に届きました。2012年は商品化の準備を進めてきました。ルフナ茶のほんのり甘いコクと爽やかなベルガモットの香り豊かな「アールグレイ紅茶」を、新しい層のお客さまにも、手に取って頂けるよう、2013年は新たな出会いも求めながら、営業活動を行います。

アロマ・ティモール 東ティモールの女性たちが手摘みした、自生の植物を使った3種類のハーブティーを今年も販売しました。夏に水出しハーブティーを冷やして飲んだり、コーヒーと共に抽出して飲んだり、料理に使ったりと、事務局でも試行錯誤を繰り返しました。「スイートバジルの花&葉」は生産が追い付かず、途中で在庫切れになってしまったという反省もありましたが、色々な飲み方の提案を行いながら、今後も「アロマ・ティモール」の魅力をアピールしていきます。



カフェ・ティモール生豆



カフェ・ティモール ドリップコーヒー



ウバ紅茶



アールグレイ紅茶



Aroma Timor

アロマ・ティモール発売記念イベント

4月7日に JICA 地球ひろばで、現地駐在員大坂智美が活動報告をしました。当日は、ハーブ専門家で薬剤師でもあるグリーンフラスコ代表林真一郎さんにいらしていただき、それぞれのハーブの薬効や美味しい飲み方のお話を伺いました。

発売記念イベントで「Aroma Timor」ができるまでのストーリーをご紹介します▶





事務所1階にオープンした「淡路町マルシェ」



アースガーデン秋



スポーツニク・チャリティコンサート



フードデックス

淡路町マルシェ、オープン

5月に事務所の一角にオープンした淡路町マルシェは1年間で地域の方とのつながりを増やし、新たな層との接点をもつことができました。また、例年のイベントに加え、新たにマルシェや地方イベントへの出店にも積極的に取り組みました。

東京事務所の1階へのフロア移動に伴い、2012年5月22日に、事務所の一角に『淡路町マルシェ』をオープンいたしました。引越しが決まってから数カ月間、スタッフ・ボランティア総出で、改装を行いました。手作りの商品陳列棚には、パルシクのフェアトレード商品をはじめ、知り合いのフェアトレード団体の商品や、PARC時代に活動を通じて知り合った有機農家さんの野菜や加工品が、所狭しと並べられています。

路面店をオープンすることで、これまでの活動でなかなか接点の持てなかった層に対してフェアトレードの広報ができ、また、これまで気が付かなかった地域のコミュニティにも接することができました。東京事務所のようなオフィス街では食料品店は少なく、地域の方からも喜ばれています。

淡路町へお越しの際は、ぜひ『淡路町マルシェ』にもお立ち寄りください。

イベント参加

2012年度は、これまでも出店していた定番のイベントに加え、各地で流行りはじめていたマルシェにもスタッフが手分けをして多数出店しました。また、交流のある団体や大学生に依頼して、地方イベントへの代理出店にも積極的に取り組み、イベントにおける効果的な広報活動について考える良い機会となりました。

2012年度 参加イベント

4月21日	アースデイ東京2012
5月12日	世界フェアトレード・デー
5月27日	アースデーマーケット、フェアトレードデー垂井
5月19日・20日	東ティモール独立10周年記念フェスタ
6月30日・7月1日	アースガーデン夏
7月 6日	東松山マルシェ
7月30日	住友生命 新都心見本市
8月11日	東松山マルシェ
9月16日	映画「コーヒーの真実」上映会、築地本願寺 安穏朝市
10月 6日	国際交流フェスタ板橋
10月6・7日	グローバルフェスタ
10月14日	希望の島・東ティモール
10月27・28日	アースガーデン秋
11月11日	鹿児島オーガニックフェスタ
11月18日	土と平和の祭典
12月16日	国際有機農業映画祭
3月 7日	FOODEXに出展
3月10日・11日	311東日本大震災市民の集い“灯” など

2012年度は、広報の強化にも力を入れました。Webサイトからの情報発信のしやすさを改善し、フェアトレード商品の販売促進のためのWeb施策を行いました。

Webサイトのアクセス対策

2010年に一新したWebサイトへのアクセスを増やすため、システムの改修を行いました。見た目は変わっていませんが、サイトに訪れた方が見たい情報へ容易にアクセスできるよう設計を見直し、スタッフの情報更新性を高めました。

また、JICAアドバイザー派遣の制度を活用し、Webにおける効果的な広報戦略を学びました。Webを利用してパルシクのフェアトレード商品の売り上げを伸ばすことを目的とし、お歳暮・冬のギフトおよびバレンタインギフトの特設ページを作成し、広告を展開しました。インターネット利用者への露出が増え、デザイン性がアップしたことにより、期間中は前年度比2倍の売り上げを記録しました。

次は、アドバイザー派遣で習得したスキルを応用し、システム改修の効果測定を行い、弱点の洗い出し・対策や、オンラインショップとの連動を強化していきます。

インターネットツールを使った広報の拡大

2011年度に引き続き、facebook、Twitterを使った情報発信に力を入れ、フォロワー者が日々増えています。主には東京事務所による各種イベント情報、フェアトレード商品情報、ホームページ更新情報などの投稿の他、東ティモール、スリランカ、石巻の各事務所スタッフによる現地のニュース、写真を投稿し、より事業地を身近に、そしてニュースを素早くお伝えできるようになりました。これからも、時代に合ったインターネットツールを利用し、各事務所から積極的に情報発信を行なっていきます。

民衆協力ニュース

活動地の状況やパルシクの活動を会員、サポーターズ、寄付者、フェアトレード商品の購入者の方々にご紹介するニュースレター、「民衆協力ニュース」を今年も6月と12月の2回、発行しました。今年度12月号よりボリュームをこれまでの2倍にして、大きな写真と豊富な情報で活動をお伝えしました。

これからも、東ティモール、スリランカ、石巻、マレーシアの人々の声をお届けします。



システム改修を行ったWebサイト



オンラインショップ。ハーブティーも新発売し、商品が徐々に増えてきました



JICAアドバイザー派遣の施策で作成したお歳暮・冬のギフトページ。商品写真とデザインにこだわりました



パルシク facebookページ



民衆協力ニュース vol.20

民衆協力ニュース vol.21

パルシック2012年度活動暦

月	日本 (東京事務局と石巻市北上町)	東ティモール	スリランカ D=デニヤヤ J=ジャフナ M=ムライティブ
4月	7日 ハーブ発売記念イベント開催 28日 石巻市北上町にっこり団地農園開園	16日 大統領選決選投票	D: 新規に25世帯が有機紅茶生産者グループに参加し、合計50世帯となる
5月	淡路町マルシェ開店 4~5日 東ティモール人歌手エゴ・レモスさん石巻訪問 18日 東ティモール独立10周年記念シンポジウム開催 19~20日 東ティモール独立10周年記念フェスタ 21日 石巻市北上中学校畑にビニルハウス完成	10日 コカマウとコーヒー価格合意会議 12日 ハーブティ初回輸出 (28kg) 20日 東ティモール独立10周年	
6月	16日 パルシック会員総会	5~7日 協同組合トレーニングを実施 8日 コカマウ組合員総会開催 マウベシ: コーヒー収穫開始	
7月		1日 循環型農業プロジェクト開始 7日 国民議会選挙 18日 サココJHRとコーヒー価格合意会議、コーヒー収穫開始 8~20日 有機認証検査	D: 生産者グループからパルシックが茶葉の買い取りを開始 15~21日 J: スタディツアー「復興に取り組む漁村の人びとと触れ合う旅」の実施 31日 M: 帰還漁民の緊急復興支援事業第1期の終了 (ジャパンプラットフォーム事業で3月1日から実施)
8月		4~12日 「フェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅」実施 7日 東ティモール第5次内閣発足	M: 帰還漁民の緊急復興支援事業第2期の開始 (ジャパンプラットフォーム事業で12月31日まで実施)
9月		12日~ 循環型農業プロジェクト対象集落で合意形成ワークショップを実施 20日~ 第一次コーヒー出荷準備開始	
10月	6~7日 グローバルフェスタに参加: 石巻からも漁業者が水産物を販売	循環型農業プロジェクト対象集落で調査	J: ヴァダマラッチ・イースト郡カッタйкаドゥ村での干物づくり事業開始
11月	13日 石巻市北上町元市民農園の畑にビニルハウス2棟完成 18日 土と平和の祭典に参加、石巻からも水産物販売 29日 スリランカ: ジャフナの干物づくり事業報告会	12日 第一次コーヒー出荷 (アラビカ28トン、ロブスタ7トン) 20日 循環型農業プロジェクト調査結果発表会	18日 D: 2012年度参加メンバーに堆肥作成用の牛を配布 23日 J: ジャフナ市内の組合局の土地に、女性グループの干物を扱う小売店を開店 30日 サリープロジェクト: 古着サリーの回収を本格的に開始
12月	1日 石巻市北上地区復興応援隊発足 16日 衆議院選挙: 自民党圧勝、最下位の投票率	5~14日 土づくり、播種、定植の技術指導を実施 国連東ティモールミッション撤退	大雨の影響で、北東部を中心にスリランカ全土で12.5万世帯以上が家屋の全壊・半壊、浸水などの被害を受けた。
1月	28日 石巻市北上町元市民農園の畑農業休憩所・作業場完成	15日~ 第二次コーヒー出荷準備開始 16日~ 養豚技術指導実施	5~9日 D: スタディツアー「有機紅茶をつくる人びとを訪ねる旅」を実施
2月	27日 石巻市北上町相川アンテナショップ、ハウス等設置完了	4日~ 薪用樹、果樹の苗を配布 24日~3月3日 桑原衛さんによる養蜂、バイオガス研修	
3月	2日 東日本大震災復興支援事業報告会 11日 東日本大震災より2年: 29万人がなお避難生活	7日 第二次コーヒー、ハーブ出荷 (アラビカ32トン、ハーブ39.8kg) 豚小屋修復作業開始	3日 D: アールグレイ紅茶がコロombo港から日本へ向けて出港 10日 M: マリタイムパットゥ郡南部の3村で井戸建設などの漁村の復興開発事業を開始 (日本NGO連携無償資金で7月31日まで実施)